

「沈む島」と「育つ岩」

ソロモン諸島マライタ島北部のラウ／アシにおけるサンゴ礁居住の動態

里見龍樹（早稲田大学）

本報告は、南西太平洋、ソロモン諸島のマライタ島北部に住むラウまたは「海の民」（アシ）と呼ばれる人々の事例に即して、サンゴ礁という生態学的環境に対する人々の関わりとその現代的変容について、人類学的に考察しようとするものである。なおその際、本報告では、主として 2018 年 8 月に得られた新たな調査データに依拠する。

マライタ島の北東部には、海岸線に沿って、南北約 30 キロにも及ぶ広大なサンゴ礁——通称ラウ・ラグーン——が広がっており、その海上には、ラウ／アシの人々が岩石状のサンゴの碎片を無数に積み上げて築いた人工の島が、90 以上も点在している。これまでの文献で「人工島」と呼ばれてきたこれらの島々は、ラウ／アシにおける日常的な居住空間をなしてきたほか、その上に、祖先靈への供犠や死者の埋葬が行われる空間をもち、かつてはこの人々における祖先祭祀の実践と密接な関わりをもっていた。大半の島々は、キリスト教の受容と祖先祭祀の実質的放棄、現金経済の浸透などの歴史的变化を経た今日においても居住され続けており、また現在でも、新たな島の建設や既存の島の拡張が行われている。

人工島という独特な建造物・居住空間との関わりにおいて、ラウ／アシの人々は、サンゴ礁が広がる海という環境とどのような認知的・実践的な関係を結んでいるのか。この人々によれば、島の建材である「岩 (fou)」すなわちサンゴは、海中にあり、「生きている (mouri)」時はゆっくりと「育つ (tae)」が、いったん掘り出されると、「死んで (mae)」徐々に「小さくなる (sifo)」。「岩」のこのような変化のため、ひとたび建造された島は、時とともに「低くなる (sifo)」と人々は言う。

ラウ／アシが認識する「岩」と島々のこのような可変性は、この人々が、自らの置かれた歴史的・社会的状況について考える際の重要な媒体となっている。すなわち一方で、マライタ島北東部の海の中で「岩」が現在も「育ち」続けているという事実は、近い将来の諸世代が、それらを建材として新たに島々を建設または拡張し、伝統的な海上居住を継続していくという見通しを肯定するものと見られている。しかし他方で、同じラウ／アシの人々は現在、自分たちの島々が過去になかったほどに「低くなり」、高潮時にはしばしば島の上が水没しになるという変化を認識している。このような変化は通常、「岩」が「小さくなる」ことにより建設後の島が「低くなる」という上述の傾向と、

メディアによって報道される世界的な海面上昇とがあいまつた効果であると説明される。

島々が海に沈みつつあるというこのような事態は、ラウ／アシにとって、「岩」は現在でも「育ち」つつあるという肯定的な認識の反面において、自らが営んできた海上居住の継続可能性に明確な疑問を突き付けるものである。そのような認識にはさらに、自らの道徳的現状に対するこの人々の危機意識をも読み取ることができる。すなわちラウ／アシは、「低くなった」島を、新たに「岩」を積み直すことで修築していたかつての父母、祖父母らと自分たちをしばしば対比し、海に沈みつつある島々を、自分たちがそのような協働の精神と勤勉さを失ってしまったことの表れとして、否定的に意味付けているのである。

本報告では、このように多義的な認識に読み取られる、ラウ／アシにおけるサンゴ礁という環境との独特的関わりを、この人々の認識と実践——人工島の建設・増築、漁撈を通じた海洋環境との関わりなど——の両面から検討する。その際理論的には、近年の人類学における「文化／自然」の二分法に対する批判なども参照・検討する。本報告のねらいは、ラウ／アシの事例に即して、これまでの人類学で主題化されることの少なかったサンゴ礁という生態学的環境と人々の実践との関わりについて考察し、さらにはそれを通じて、現代の人類学における人間－環境関係についての議論に理論的に貢献することにある。

キーワード メラネシア、ソロモン諸島マライタ島、「海の民」、サンゴ礁、自然